

文部科学省
「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」

平和共存社会を育む ひろしまイニシアティブ拠点
中山間地域・島しょ部対策領域

第4回円卓フォーラム(2017)
成果報告書



I	第4回円卓フォーラムの概要	p 1
II	開会挨拶、参加者、構成	p 2
III	第1部 地域と農学フィールド教育	p 3
IV	第2部:地方創生を支える人材育成プログラム	p12
	添付資料	p18~26

広島大学 地(知)の拠点 第4回円卓フォーラム

「平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点」

中山間地域・島しょ部対策領域

地域と学生がつくる地域志向型教育

～農学系フィールド教育がめざすもの～

要 旨

I 第4回円卓フォーラムの概要

広島大学の「地(知)の拠点整備事業(COC)」

1 文部科学省により2013年に採択された広島大学の「地(知)の拠点整備事業(COC)」は、「平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点」(以下、イニシアティブ拠点)として、大学が自治体を中心に地域社会と連携して、地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めることを目的としている。広島地域の共通課題を三つ設定しているが、この円卓フォーラムは、中山間地域・島しょ部対策(条件不利地対策)領域が開催するものである。本年度が第4回目の開催になる。

2 第4回フォーラムは、2017年12月7日(木)、広島大学学士会館レセプションホールにて、生物生産学部・生物圏科学研究科が中心になり、一般社団法人国立大学協会のご支援を得て、企画・開催されたものである。

3 中山間地域・島しょ部対策領域を主に担当しているのは生物生産学部であり、農漁村地域をフィールドに、体験学習を出発点とする地域志向型教育を実践している。条件不利にもかかわらず、優れた活動



を行っている地域住民、地域社会、市町と強く連携し、学生に体験活動やフィールドワークを通して、地域の現場で起こる様々な問題に興味・関心を抱いてもらい、深く学習してもらうための取り組みである。

4 COC 活動の最終年度にあたる本年度も、広島県内の 7 市町 9 地域の住民の皆様、自治体関係者などの御協力をいただき、教養ゼミでの体験学習、インターンシップ、特別フィールド演習などを実施した。体験学習に加え、特別講座、インターンシップ、さらには地の拠点関係の科目を受講する学生は多く、活動には生物生産学部の学生はもとより、全学の学生・院生が参加するなど、全学的な広がりをみせている。

5 中山間地域・島しょ部対策領域では、「**地域と学生がつくる地域志向教育～農学系フィールド教育がめざすもの～**」をテーマに、第 4 回円卓フォーラムを開催することにした。

第 4 回円卓フォーラムが目指すもの

6 中山間地域・島しょ部対策領域では、毎年、地域・学生・教職員が一同に会して円卓フォーラムを開催している。今回は、最終年度を迎えた COC 活動の成果をまとめるとともに、近隣の大学と協力して実施している共同利用拠点教育の経験も踏まえて、地方創生に貢献できる人材をどのように育成するか、を考えることにした。

7 中山間地域・島しょ部対策領域の拠点となった生物生産学部は、平成 21 年度より始まった「教育関係共同利用拠点」として認定を受け、「食料の生産環境と食の安全に配慮した循環型酪農教育拠点」、「瀬戸内海における里海フィールド科学教育の新展開」、「瀬戸内海における洋上里海教育のための共同利用拠点」の活動を実施している。この活動には、県内外にある関係大学・学部から学生が参加し、広島大学の学生とともに、フィールド教育の真髄を学習している。広島大学が有する附属施設を活用した独自のフィールド教育へと展開させることで、学習へのインセンティブを高めている。

8 第 4 回フォーラムは次の 3 つを課題として掲げた。

1) 最終年度を迎えた COC 活動の成果や課題を、連携市町、地域の皆様、学生、教職員がそれぞれの視点と立場から評価する。

2) 共同拠点活動の成果も踏まえて、地域の支援・協力を得て実施する体験型教育の充実をはかり、農学系フィールド教育の一層の充実をはかる。

3) 農水産業が立地する地域社会に対する学生の興味関心をさらに高めるために、COC が目指した地域貢献・社会貢献という視点を教育に取り入れるためのカリキュラムとプログラムの充実に向けて提言を行う。

II 開会挨拶、参加者、構成

1 生物圏科学研究科支援室の和田副室長の司会によって開会され、本学の社会連携担当理事・副学長高田隆教授が開会の挨拶を行った。「平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点」の目的、内容について述べ、大学が「地域志向型人材育成プログラム」の充実

に努めてきた状況について触れた。中山間地域・島しょ部対策領域では、広島県・関連市町・地域の皆様の御協力とご支援を得て、多彩な活動が企画・実施されたこと、学生の地域への関心、専門教育へのインセンティブが高まっていることに対し、感謝の意を示した。参加学生に対しては、今後も地域と良い関係を築きながら勉学を続けて欲しいとの期待が述べられた。

2 和田副室長から、第4回円卓フォーラムを開催するにあたり、一般社団法人国立大学協会より、ご支援を賜ったことが紹介された。

3 続いて、連携市町、受入地域、関係機関からのご参加者の紹介が行われた。全体で170人の参加があり、地域等では2市2町、10地域、県庁、その他であった。

4 円卓フォーラムは2部によって構成された。第1部は、「地域と農学フィールド教育」、活動の概要と成果、フィールド学習を受講した学生の視点、地域インターンシップに参加した経験、学生を受け入れていただいた地域・市町の立場からのご意見、活動に関わった教員の視点、から議論いただいた。第2部は、「地方創生を支える人材育成プログラム」、と題してご協力をいただいた地域・自治体、学生・教職員が自由に、今後の地方創生や地域貢献できる人材育成のために必要な事柄について討論した。

III 第1部 地域と農学フィールド教育

COC活動の概要と成果

1 中山間地域・島しょ部対策領域の担当教員、**生物圏科学研究科の山尾政博教授**が円卓フォーラムの趣旨説明と構成について説明した。今年度最終年となるCOC活動の成果をまとめるとともに、近隣の大学と協力して実施している共同利用拠点教育の経験も踏まえて、地方創生に貢献できる人材をどのように育成するかを考えていくことが目的である。

2 COC担当教員、**生物圏科学研究科の細野賢治准教授**が、中山間地域・島しょ部対策領域の4年間の活動概要と成果の説明を行った。この領域では、2つの手法を用いて拠点づくりを進めてきた。第1に、地域社会の活力低下という問題に対し、条件不利地域といわれる地域でも多くの地域資源などを発見できたものの生活の中で厳しい部分もあり、その対策等に積極的に取り組み、地方創生のための努力をしている地域の人たちと連携してきたことである。第2に、食料生産・資源・環境・生態等を対象にした生物生産学部を中心に、条件不利化していく農業・水産業、食料産業を基盤とした社会の活性化に向けて活躍できる人材を育成してきたことである。

3 COC 活動の根幹をなす地域志向型のカリキュラムの成り立ちについて説明があった。第1段階は「地域を知る」、第2段階は「地域と関わる」、第3段階は「地域と協働する」、である。PBL (Project-based learning もしくは Problem-based learning) にもとづく体験学習(「教養ゼミ」で実施)、「連携特別講座」では、地域政策・行政、農商工連携、農業法人、農産物やサービスの開発などに携わっている方に講師をしていただいた。第2段階の地域インターンシップでは、全学の学生たちが連携市町・地域にでかけた。フィールドワーク特別演習では、現地で調査実習を行い、その成果を地域に還元させていただく活動を行った。9市町で学生が成果を報告した。これらはCOCのコア科目だが、関連する既存のフィールド関係科目も受講するなかで、学生は問題発見能力を身に付け、段階的に問題解決能力を身につけることができた。知る力・関わる力・協働する力を育み、将来の地域貢献人材を育成できるように活動を続けてきた、との報告であった。

教育関係共同利用拠点の活動概要と成果

4 生物圏科学研究科の谷田教授が、教育関係共同利用拠点について説明した。旧来、全国の大学にある附属施設は自大学の教員・学生が使うことを前提に運営されてきたが、文部科学省は7年ほど前から他大学の教員・学生も使用できる制度を立ち上げた。広島大学からは農場・水産実験所・練習船の3施設が登録された。農場は、平成22年度に「食料の生産環境と食の安全に配慮した循環型酪農教育拠点」として乳牛を中心とした活動拠点として認定された規模の大きな施設である。「命の尊厳を涵養する食農フィールド科学演習」(非農学系学生)、「酪農フィールド科学演習」(農学系学生)、「保育系学部生のための食育フィールド科学演習」を開講している。「保育者のための食育フィールド科学演習」は、現役の保育者を対象に開講している。

5 水産実験所(竹原ステーション)の大塚教授は、「瀬戸内海における里海フィールド科学教育の新展開」について説明した。瀬戸内海を里海のフィールド教育の場として活用している。実験所のある竹原市には干潟があり、藻場があり、近くに立地する栽培漁業センターでは牡蠣・海苔・カブトガニの養殖も盛んである。北海道大学・京都大学・長崎大学との間に単位互換制度を結び、韓国のチョンナン国立大学とも連携している。中四国農学系大学の単位互換制度も機能しており、私立大学や高等専門学校がフィールド科学実習を行う場も提供している。竹原市と連携し、カブトガニに関する啓発活動も行っている。

6 練習船豊潮丸(以下、豊潮丸)の運営委員長の坂井教授は、瀬戸内海の里海を学習の場とした活動を紹介した。漁船サイズでは中型船になる豊潮丸は、機動力を生かして小さな港でも学生の教育活動を行えるという特徴を備えている。里海教育の拠点活動を行い、他大学が専有して、実習が行えるように航海を独自に設けている。広島大学の教員が主催する航海の余席を活用して、他大学の学生も乗船できるようにしている。年間500名を超

える乗船者があり、他大学の学生が 1/4 程度を占めている。「里海の魅力に気づききっかけを与える」ための役割をはたすべく、瀬戸内海・広島湾・安芸灘を中心としながら、南は沖縄まで航海している。

以上 3 つの教育関連共同拠点利用について、本日の会場にもパネルが展示された。

体験学習に参加した学生からの報告

7 生物生産学部 1 年の橋本ゼミ (11 名) の学生が、三次市道の駅ゆめランド布野を拠点にした体験学習の報告を行った。大前農園でアスパラガスの収穫体験、江の川漁協のご協力による鮎の塩焼きと投網体験、道の駅廣田代表取締役の講義を受けた。大前農園は 1987 年よりアスパラガスの栽培を開始し、県内有数の規模を誇っている。その他に、コメ・イチゴ・大豆を育てていて、加工品の製造にも熱心に取り組んでいる。エコファーマーの資格を取得し、環境保全型農業の推進をはかっている。参加学生は、ビニールハウス内での収穫作業を体験した。気温の高いハウス内で、市場出荷できるようにサイズを揃えて収穫するのは思った以上に大変であった。



8 江の川漁協は、鮎の放流から釣りの管理、更に川の魅力を伝えるための活動を行っている。アユ漁が抱える問題を、どのように対処しているかについて深く学習することができた。道の駅ゆめランド布野は、布野町や作木町で取れた野菜を販売する直売所やその加工品を販売する売店、野菜中心の惣菜バイキング、地元の食材を用いたアイスクリーム屋などがあり、道の駅全体で布野町の特徴を出していた。高齢化が進む中での人材不足による経営維持の大変さ、尾道・松江道が開通し、



来客数が減少したことにより昼以外の時間帯の客足がかなり落ち込んでいることなどを知った。道の駅では客足を増やすために、様々なイベントを企画し実行していた。

9 最後に学生たちは、道の駅には若い層の顧客が少ないという問題点を考えて、SNSなどを用いた宣伝活動を提案した。また、アスパラガスを使い、喉越しが良い生麺をつくるには、大学と連携し、成分分析を行い色落ちしないレシピを考案することを提案した。その他の商品開発の案を示した。

インターンシップに参加した学生からの報告

10 教育学部・棚橋ほのみさん、生物生産学部・小佐井健士郎さんは、安芸太田町の井仁地区のインターンシップに参加した。美しい棚田をもつ井仁地区だが、高齢化や過疎化によってその維持が困難になっている。インターンシップに行く前には、どのような地域課題解決の方向がよいのか関心があった。また、限界集落において活動を続ける地域おこし協力隊の役割とはどのようなものか、興味があった。他の学生たちと一緒に、インターンシップに加えて、井仁地区が主催する各種の体験会や催し、地域で毎月開催されている棚田サロンにも参加して地域の人たちと交流を続けている。



11 2人からは他の年度のインターンシップの活動状況や、最近の井仁の地域興しの様子を映したスライドが紹介された。同地を訪れる学生たちをいつも暖かく迎えてくれる人々や地域おこし協力隊の友松祐希氏への感謝が示された。2017年9月末に、井仁地区住民の方々や安芸太田町役場の職員の方々と一緒に長崎県波佐見町で開催された全国棚田・千枚田サミットに参加することができた。このサミットは、井仁と似たような現状や課題を持つ地域の方々が集まり、全国から集められた事例や取り組みについて、情報交換の場として開催された。



12 2年生の夏に参加したインターンシップ以来、井仁地区の方々にはお世話になり、それまでの自分の想像と現実の集落と間の大きな違いに気づかされたことが報告された。想像以上の不便さはあっても、地域住民相互の思いやり、地域の将来について真剣に考える様子などをみることができた。そこで学んだものは大きく、卒業後もこれまで築いてきたつながりを大切にしていきたいとの思いが述べられた。これまで井仁地区にお世話になってきた学生を代表して、深い感謝の意が述べられた。

受け入れ地域からの視点

13 東広島市トムミルクファームには、毎年学生たちがインターンシップで訪れ、29年度には体験学習を受け入れた。代表取締役冲正文様からは、小学生の体験学習を受け入れるきっかけ、インターンシップにて大勢の学生との交流ができた経験が報告された。



14 消費者との交流を重視し、ジェラードの生産・販売を行うなど、6次産業化には早くから取り組んだ。牧場の中にレストラン部門や菓子製造部門などを増強したが、農・商・工の連携を求める企業の人たちと協力し、セントルマルシェを始めた。この活動に、インターンシップに来てくれた学生、ボランティアの学生などが多数参加してくれた。広島大学のインターンシップを受け入れてから、こうした地域活動がどんどん加速している。農商工を乗り越えて産学官の連携が起きている。中山間地域が持続していくために、広島大学は東広島市にあるという立地を生かした活動を展開して欲しい、との意見が述べられた。地域住民の多くが、広島大学の学生のボランティアには非常に感謝している、との謝意が示された。



15 世羅大豊農園 組合長理事祢冨谷全様

からは、最初に体験学習を受け入れた際、学生たちのやる気のない様子を見せつけられた時のことが紹介された。以来、毎年体験学習の受け入れを行い、今年も来ていただき梨の摘花をしていただきましたが、新高梨がたわわに実った。自身の経験を紹介しながら、学生には地域との交流を積極的に行って欲しいとの要望が出された。学生時代に大人との会話を豊富にもち、地域との交流を楽しむことによって、社会にでる時には役に立つ。大豊農園に体験学習に来た学生の皆さんが気楽



に顔を見せてほしい、との意が示された。

連携市町にどのようにご協力いただいたか

16 安芸太田町地域づくり課長、小笠原敏子様からは、限界集落が多い安芸太田町だが、この条件の悪さを逆手に取って何かできるという機運ができているとの報告があった。安芸太田町と広島大学とのつながりは10年以上の長きにわたり、平成22年には町を元気にするための活性化プロジェクトである安芸太田町未来戦略会議・マスタープランづくりには、官民学連携ワークショップにファシリテーターとして大学に参加していただいた。地域住民と行政は、特に相対する場面になりがちだが、大学の研究室が入ることで、冷静かつ本音の議論が可能となり、問題を客観的に注視することに繋がった。



17 広島大学には地域住民だけでは運営が年々厳しくなっていた井仁地区の棚田体験会の田植え・稲刈りの運営に参加していただいている。棚田を核とした地域振興に取り組もう、課題解決のため地域おこし協力隊を募集しよう、高齢化・後継者不足と言われる中このまま手をこまねては行かない。厳しい状況ではあるが前向きに取り組むを始められ、行政と地域の協働のまちづくりに繋がった。現在2人目の地域おこし協力隊員がカフェを開くまでになった。

18 平成26年にCOC活動の受け入れの打診があり、教養ゼミの中で学生が地域で学び、体験するという新しい地域志向プログラムということでもあり、町としてもこれまでの経験から、ぜひ井仁地区に受け入れようということになった。受入窓口になる井仁びちゅ会では、1年限りではない継続的な活動にしたいと要望が示された。この受入活動は、地域おこし協力隊員が担い、地域活性化に向けた活動の中に取り組まれている、地域主導の形が取られている。継続して参加される学生もあり、後輩への指導や助言ができ、体験会の運営や新たな視点での次回への結びつきができている。留学生の参加もあり、日本の中山間地域の棚田の景観、住民の生活に触れていただいている。

19 小笠原敏子様からは、井仁地区での住民と学生との間の交流活動の様子が詳しく紹介された。町では、井仁地区での取り組みは、地域活性化への成功例ではないかと考えている。少子高齢化・人口減少、農林業の後継者不足、課題は多いが、安芸太田町には多くの

地域資源がある。学生には、井仁地区にとどまらず多くの地域に関わっていただきたい、との要望が述べられた。安芸太田町の現状は、この国の多くの市町村の何年後かの姿ではないかと思う。中山間地域島しょ部の抱える問題、自立活



性化に対して中長期の人材育成、組織形成のあり方の視点からこれからも継続して調査研究等をしていただき、他の市町村の地域振興の先例となるよう提言していただきたい、とのことである。広島大学に対して感謝の意が表された。

教養ゼミの担当教員の視点から

20 広島大学生物生産学部の船戸耕一准教授は、教養ゼミで体験学習を、PBL

(Project-based learning もしくは Problem-based learning) と言われる課題解決型学習にもとづいて実施することの意義を説明した。船戸准教授は平成 27 年、28 年に教養ゼミを担当したが、グループの学生たちは解決先を議論し、地域の方々のご協力を得て行動に移した。三次市の道の駅ゆめランド布野では、学生達にここに来てもらうアイデアがほしいという要望が出された。それをきっかけに、新しいアイスクリームの開発が提案された。広島大学と道の駅ゆめランド布野と三次市の 3 者による産学官連携という形で商品開発がスタートし、最終的には、酒粕をいれたアイスを作ることになった。

21 アルコール量を測る、酒粕の量を測る、ネーミングやキャラクターデザインを描くなど、課題は多くあった。試作会で作ったアイスを大学に持ち帰り、アルコール量を測定して酒粕量を決めた。ネーミングは、学生から提案のあった「オリゼさんのアイ酒」に決定した。このネーミングをもとに、麴菌をモチーフにしたデザインが学生より示された。最終的には、アイスクリーム 2 種類ができあがり、道の駅で販売されるとともに、広大生協でも販売が開始された。売れ行きは好調で、1 年間で 5,000 個あまりの販売実績がある。こうした教養ゼミを発端にした活動が評価され、今年度には関わった学生たちに副学長賞が授与された。



22 船戸准教授は、これまでの経験を踏まえて主体性を持って行動してくださいとのメッセージを伝えた。特に、3 年までの間に様々なチャレンジしておくのが望ましい。地域に入

りこんで、解決策を見つけるようなことにもチャレンジして欲しい、との要望が学生に伝えられた。

運営した担当教員の経験から

23 天野通子元特任助教 (COC 担当) は、地域志向型教育に対する、学生・教員・地域の方の評価、大学と地域が連携する意義、人材育成の視点から、地域志向型教育がめざすものについて報告した。教養ゼミに参加した学生のほぼ全てが、よかったと答えており、とてもよかったと感じた学生も多くいた。体験が楽しかった、自然の中で活動できた、地域の人話がきけた、農村の現状について勉強になった、などと回答していた。今後も地域とはなんらかの関わりを持ちたいと感じた学生が多い。体験学習は、大学の強制的プログラムとして、地域と学生をつなぐきっかけになった。

24 地域や市町の関係者の皆様には、大学と体験学習に取り組んだ事に対してよかったと評価していただいた。学生や教員が地域に興味を持つ姿勢がみられるようになったのが理由の一つであった。ただ、地域の課題解決や個人との継続的なつながりにまで発展しにくい点が指摘された。しかし、地域、市町では今後も大学との連携を、長期的視点に立って強化していく意義を見いだしていただいた。

25 COC の教養ゼミ担当教員は、体験学習が学部教育の導入として有効であったと評価している。また、教員自身も、体験学習を通じて地域への関心を高め、新たな発見、問題意識をもつようになったとの感想が寄せられた。地域住民との会話や共同作業、学生の成長を通じて、教員の教育意欲や研究意欲が刺激され、様々な取り組みにつながりつつある。教員は、学生には実践から課題を考える力につながる。地域やグローバル社会を問わず、課題解決能力の向上につながる。主体的に考え問題を解決する能力を高めるのに効果がある、と評価している。

26 天野元特任教員は、人材育成の視点から、地域志向型教育の成果がいくつかあることを指摘した。第1には、学生間での知識や体験が移転され、COC 活動の成果が学生間に普及し、共有されている。こうした学生の動きが、知の出発点であった教員の間にも変化を呼び起こした。第2に、地域志向型教育のノウハウの蓄積が進んだ。農林水産業に関連した学部では、改めて実践的な科目を設定する必要が認識されている。教員は専門分野と地域実践課題を関係させて深く学ぶことの動機付けの手法について、COC 活動を経験しながらノウハウを蓄積しつつある。大学にはこのノウハウを生かすための事務体制や業務システムが求められていることも明らかになった。第3に、COC の教育活動と連携した地域では、大学生や若者を受け入れる基盤作りが進んだ。社会的・経済的インセンティブが見えるようになった。

27 大学はコーディネーターが中心となって地域との連携をはかり、教員が教育プログラムをつくり、それぞれの教員の専門知識を導入した。連携地域では、行政組織や地域の関係者が大学との連携に応じ、教育の場を提供し、現場の専門知識について体験を通じて学生に伝えていただいた。こうした仕組みを通じて、地域を志向する若者にむけた人材育成を行うことができた。地域志向型教育を推進する実地体制も構築され、機能するようになった。ただし、地域体験する学生に対して、事前・事後学習を徹底させる、十分な教育と安全体制をとって、学生を地域に送り出す体制を大学は整える必要がある。

28 大学の地域志向型教育がめざすのは、地域創生活動に将来なんらかの形で関わる可能性がある、関係者予備軍を育てることである。学生は、大学で実践にもとづく専門的知識をみにつけ、卒業後、社会で経験を積み、食品産業や行政職などの多様な職場と地域で、役割を果たしていく。理解ある消費者として、農業者や漁業者と間接的に関わっていく。なかには、地域活動の主体者として活躍する学生もいるかもしれない。大学の地域志向型教育は、地域貢献への即効性は高いとはいえないが、長期的にみて、地域を多様な立場で支える人材を育て、持続的社会の構築にむけた全体のボトムアップをはかるためのものである。

29 以上のようなCOC担当教員のまとめを踏まえて、第2部ではさらに具体的に議論することにした。

IV 第2部：地方創生を支える人材育成プログラム

地域・市町からの発言

1 2部は **COC 担当教員細野准教授**が司会を務めた。円卓フォーラムの目的は、第1に、最終年度を迎えて COC 活動の成果や課題を、連携市町、地域の皆様、学生、教職員がそれぞれの視点と立場から評価することである。第2に、地域の支援・協力を得て実施する体験型教育の充実をはかり、農学系フィールド教育の充実をはかることである。第3に、農水産業が立地する地域社会に対する学生の興味関心を高めるために、COC がめざした地域貢献・社会貢献という視点を教育に取り入れるためのカリキュラムやプログラムの充実に向けて提言を行うことである。2部の限られた時間のなかで、第1の点、それぞれの立場でCOC活動の成果と課題について評価することにした。



2 **船戸准教授**は、教養ゼミに参加し、三次市の道の駅ゆめランド布野での酒粕アイスの開発に関わった。学生の提案を快く受け入れていただいたことに謝意を述べた。道の駅及び三次市役所のご担当の皆様のご協力があり、学生のモチベーションが高く保てた。今後も体験学習を継続できるよう、ご協力をお願いしたい旨の発言であった。

3 三次市布野町大前農園の大前氏からは、体験学習の申し込みがあった時の経緯が話された。個人経営の農園だが、有機栽培に取り組み、消費者に直接販売をしていることもあり、収穫体験では時間も取られてしまうことから断るつもりであった。農園は6次産業化を行いたい商品化までにはいたっていない。アスパラ等の成分分析等を行ってもらえるのなら、学生を受け入れてもよい旨を伝えた。参加した学生には、商品にするための研究、商品化できなかった原因等を探してほしいと伝えた。その後、他大学の学生がインターンシップに来た時に、広島大学との連携の話をする、たいへん羨ましがっていた。広島大学 COC 活動の取り組みは素晴らしいものなのだと実感した、とのことである

4 道の駅ゆめランド布野では、体験学習をきっかけに酒粕アイスが開発された。大前氏は、三次市の町村合併以前に野菜の直売所を立ち上げたが、大変苦勞したとのこと。高速自動車道の開通によって、道の駅ゆめランド布野は厳しい立場にあるが、地域住民だけでは6次産業化は難しく、学生の若い知恵があつてこそ何かできると考える。インターンシップや体験学習をこれからも続けて欲しいとの要望が出された。

5 安芸太田町井仁地区のいにびちゅ会会長の河野氏は、広島大学と同会とが、ウイン-ウインの関係でありたいと表明された。過去に棚田体験会に参加した学生が、卒業後も元気な姿を見せてくれたりすることがあり、非常に嬉しかった。インターンシップを最初に受け入れた時には、「大丈夫かな、やる気があるのかな」という思いがあった。井仁地区は人口も少なく、世帯数も少ない、高齢化も進んでいることから、肉体労働が多いためである。井仁地区は、今後も棚田を中心に自然の特徴を生かし、人間と人間のつきあいを続けていく。インターンシップを受け入れてよかったと思っており、今後も広島大学とのウイン-ウインの関係を続けていきたい、とのことであった。



6 大崎上島町食文化海藻塾塾長の道林氏か

らは、体験学習の時期は海藻の観察ができる冬から春ではないが、磯の観察会に合わせた体験会に学生には参加してもらった、との報告があった。磯観察の他に、車エビ・カキの養殖経営、大崎内浦漁協等にも協力いただいた。大崎上島の漁協は小さい組合だが、様々な活動に取り組んできた。海藻塾はこれまで交流・つながりというのを大事にしてきた。広島大学の教員とも深いつながりがあって体験学習をお受けした。大崎上島町は、離島であるがゆえに、都会では失われつつある人と人のつながり、人と自然のつながりが残っている。町自体も教育の島をめざして、中高一貫の広島県グローバルリーダー校の設置を準備している。海藻という地味な分野だが、太古の昔から大事にしてきたものを生かしたい。今後も教育研究機関である広島大学からの支援を仰ぎたい、とのことであった。

7 東広島市河内町の農事組合法人ファームおだの吉弘氏は、今回のフォーラムに参加し、この4年間の活動の成果を確認し、当初からCOCの活動に参加・協力してよかった、と感想を述べられた。ファームおだは103ヘクタールの農地を持って、水稻、大豆、そばなど耕作しているが、稲の田植えを学生に体験してもらうことにした。一枚の広い田を最後まで手植えで植えていただくようお願いした。種を撒き、様々な条件のもとで農作物を作るわけだが、途中でリセットできない。それを体験できることは、将来に生かされると確信している、とのことであった。

8 吉弘氏は、以前、社会人学生として広島大学大学院に在籍していた。この時には、地元の大学生が、地元のことを知らないというのはいかかなものかと思っていたが、今回のCOC事業を通して、変わったと感じた。今後も、学生には農業・農村に来てもらい自分の将来を考えてもらえば、大変ありがたいとの思いを表明された。

9 世羅高原6次産業化ネットワーク会長・世羅幸水農園組合長理事の原田氏は、世羅町のフルーツ王国夢祭り参加したインターンシップ学生のことを報告した。このネットワークには74団体の会員がいるが、中高年が中心だが、学生が入って良い勉強の機会になったのではないかとのことであった。学生たちも打ち解けて、餅つきをし、高いところへ上がって餅まきまで一緒にやってくれとことには大変感謝している。原田組合長は、インターンシップや体験学習を、外から見た世羅について意見をもらいたく受け入れを始めた。だが、フォーラム等で他の地域の方々の意見を聞くと、世羅にもどっぷり浸かってもらって意見を言ってもらえば、双方が勉強になると思った。インターンシップに参加した学生から、チョコレート作りを世羅町でできるのでは、との提案があった。様々な意見や提案がもらえるのは、体験実習やインターンシップを受け入れた成果である、と考えている。



10 呉市豊町八王子会・新果園の末岡氏が住む大長は、かつて黄金の島と呼ばれるみかんの産地であった。しかし、高齢化が進み、若者が流出した結果、最盛期の1/4程度しか耕作されなくなった。八王子会では、島の祭りをなくさない、これ以上島を衰退させないために様々な活動を行っている。大長には櫓祭りや弓祭りがあるが、学生には櫓祭りに参加してもらった。祭りの太鼓台の担ぎ手が高齢化したため、若い力を借りたいという思いから、体験学習の受け入れを始めた。体験学習では、みかん園・レモン園での作業を講義を交えて実施している。後継者がいない大きな原因は収入にある。その問題を解決するために、柑橘を使った加工品を販売しているとびしま柑橘クラブに参加している。今後は、インターンシップの学生らに、こうした活動にも参加を呼び掛けたい。大長では、黄金の島再生プロジェクトを作り、広島市内の大学生150名くらいと活動しているが、是非、こうした活動にも参加していただきたいとのことであった。

11 太田川漁業協同組合の谷氏は、河川環境の整備を中心に体験学習を行った様子を報告した。胴長を履いて、石がある川の中を歩くのは大変な労力がある。これを組合員だけで行うのは大変である。学生には河川環境を守る活動の大変さを知ってもらい、今後にかかしてほしい。太田川漁協では、鮎釣りの道具レンタルをし、無料で鮎釣りも始めることができる。これを機会に川に親しんで欲しい、とのことであった。

12 株式会社島ごころ代表取締役の奥本氏は、毎年講義を行う連携特別講座では、地域とともに歩いていくために企業（菓子屋）として、どのように地域と向き合っていくのかという話をしている。島ごころのある瀬戸田町は、平成11年にしまなみ海道が開通した時は、

観光客が年間 300 万人来ていたが、その後は 20 万人程度まで落ち込んだ。主力商品であるレモンケーキの島ごころを開発した平成 21 年には、レモンは畑に捨てられているような状況だった。地域の特産品をどのように発信すればいいのか模索しながらレモンケーキを作ってきた。その時に広島大学の教員と交流する機会があり、マーケティングや経営戦略などの本を教示してもらい、また、学生と一緒に島ごころの SWOT 分析を行ってみた。関わってくれた学生が卒業研究の題材してくれたことは、とても嬉しく思っている。



13 奥本氏は、人手不足や若手後継者不足に悩む産地は多いが、主体的に自分のやりたいことを発信していると、自ずと仲間が増えることを強調した。島ごころでは、いい人材を探すのではなく、自分たちで育てていこうと考えている。今年、瀬戸田町でレモン祭りを開催した。観光客も 70 万人まで回復しているとのことである。

14 三次市布野支所の植岡氏は、教養ゼミの体験学習、インターンシップの引き受けの経験を述べた。最も苦勞したのは何をやらしてもらおうか、ということだ。学生が楽しめる内容、興味を持てる内容にするために、体験できることを種々詰め込んだ。道の駅ゆめランド布野や大前農園のご協力があり、酒粕アイスの開発も進んだ。今年度もアスパラガスに関連した提案をいただいたので、是非検討してみたいとのことであった。

15 世羅町産業振興課の正田氏は、世羅町と広島大学は、COC 事業が始まる前から、包括連携協定にともなう連携事業を行ってきた経緯に触れた。今回のフォーラムでは、楽しく取り組めるものだけでなく、学生にしんどい体験してもらっていることを聞いた。来年度からは少々負荷のかかるものも取り入れてみたい、と考えた。また、フォーラムの 1 部で説明された COC の目的を改めて実感した。中山間地域・島しょ部が抱える課題について学生時代に体験し、将来、条件不利地域を支えることができるような人材を育成・教育したい、というものだった。今後ともこのような機会を利用し、地域と大学がお互いを高めていけたらよいとのことであった。

16 広島大学大学院博士課程前期 2 年の黒木氏は、TA (Teaching Assistant) という立場で教養ゼミに 3 年間関わってきた。フォーラムのような場で活動のフィードバックが行われ、地域の方が学生に何を求めているか、学生が地域で何をしたいのかがはっきりする。意見交換を行うことで地域と大学がより



よい関係を築くことにつながると確信しているとのことであった。1年生には、積極的に地域と連絡を取り合い、現地に行くなどしてよりよい関係を築いていって欲しいとの助言をした。

17 広島大学生物生産学部の齋藤氏は、これまでは一つの地域の方の話を伺うことはあったが、このフォーラムのように多くの地域の方から話を一度に聞くことはなかった。良い機会になった、地域の皆さんが学生に何を求めているかもわかり、勉強になったと述べた。

17 広島県地域政策局中山間地域振興課の長岡氏は、討論を締めくくるにあたり、コメントと講評を行った。学生が地域に関わるのが素晴らしい取り組みで、かつ最先端のことだと考えた。本日のフォーラムでの討論を振り返り、地域の皆様、学生、教職員それぞれが変化してきたのではないかと感じた。それぞれの立場での変化もさることながら、特に印象に残ったのは、船戸准教授が報告された課題解決に対して、提案だけでなく行動に移されている事例が出てきたことである。このような取り組みが、これから地域を変えていく、力になるのではないかと考える。

18 長岡氏は、受入れた地域・市町では、学生との交流を通じて人と人とのつながりというのを感じたのではないかと述べた。地域での体験は、学生が卒業した後も、1人の人間として地域とのつながりが残っていくだろう。大学での地域体験を、今後の人生で地域とどのように向き合っていくかを考える上でよいきっかけにして欲しい、と講評した。



19 司会の細野准教授は、地域・市町の参加者の皆様にご発言いただけなかったことを詫言、第2部の討論会を終了した。

表彰式、閉会の挨拶

20 大泉コーディネーターは、広島大学地（知）の拠点活動を行うにあたって、たくさんの方々、地域、市町の皆様にお世話になった、と謝辞を述べた。生物圏科学研究科（生物生産学部長）では、この間のご協力に感謝し、吉村研究科長より地の拠点教育研究功労者表彰を行うことを紹介した。

21 吉村研究科長は、安芸太田町いにびちゅ会会長の河野司氏（代表）に対して、地（知）の拠点と連携した地域志向教育研究の実践ならびに中山間地域・島しょ部への貢献を志向する人材の育成に多大なる尽力をしていただいた功勞に対し、深甚なる感謝の意を評するためここに表彰する、として表彰状を贈呈した。続いて、以下の皆様に対して同様の内容の表彰状を贈呈した。



（円卓フォーラムにおける表彰者の皆様は以下の通り。対象者全員の氏名は添付資料2）

井仁自治会会長 大江眞様。大崎上島町食文化海藻塾塾長 道林清隆様。フィッシング中村 中村修司様。株式会社島ごころ代表取締役 奥本隆三様。呉市新果園 末岡和之様。農事組合法人世羅幸水農園組合長理事 原田修様。農事組合法人世羅大豊農園組合長理事 柁宜谷全様。東広島市有限会社トムミルクファーム代表取締役 沖正文様。東広島市農事組合法人ファーム・おだ 吉弘昌昭様。広島市太田川漁業協同組合代表理事組合長 森正記様。三次市大前農園 大前憲三様。

22 吉村研究科長は、COC 活動にご協力いただいた地域・市町の皆様に対して感謝の意を表した。広島大学の大きな目標は、平和共存社会を作ることであり、教育では平和について力を入れている。その平和の中には食料生産や地域社会の存続が含まれている。生物生産学部では中山間地域・島しょ部に焦点を当てた活動を実施してきたが、学生諸君は、体験学習やインターンシップを通じて、人と人のつながり、食べ物、環境等について現場レベルで学べたと確信している。グローバル人材は、海外に出た時にも自分の国・地域を語れるということは重要なことである、と述べた。

23 フォーラムでは農業は総合産業だとの指摘があったが、実際、農学は総合的な学問であり、生物学、食品加工、流通、農林水産業の全体を通して一つの学問となっている。酒粕アイスを開発する際、学長にも試食してもらったが、アルコールは大丈夫なのかと質問があった。これに対して、実際にアルコールの量を科学的に検証していた船戸准教授は大丈夫だと即答した。このように広島大学ができることを通じて、地域と連携し、地域により良いものを還元できればと考える。今後も地域・市町の皆様方のご支援をいただきながら、大学教育の向上をはかり、地域産業に貢献していきたい。

24 COC 事業は予算的には今年度で節目を迎えるが、今後の活動の継続を大学に依頼するとともに、今後とも地域・自治体の皆様には何かとご協力をお願いする旨を述べて、閉会の挨拶を終えた。

添付資料 1

第 4 回円卓フォーラム 広島大学 COC 連携市町・地域等出席者一覧(敬称略)

市町等	連携地域・市町等	出席者	出席者	出席者
安芸太田町	いにびちゅ会会長	河野 司		
安芸太田町	井仁自治会長	大江真		
大崎上島町	大崎上島町食文化海藻塾 塾長	道林清隆		
大崎上島町	フィッシング中村 船長	中村修司		
尾道市	株式会社 島ごころ 代表取締役・専務	奥本隆三	奥本寿華	
呉市	八王子会 新果園	末岡和之		
呉市	とびしま柑橘倶楽部	秦 利宏		
世羅町	世羅幸水農園 組合長理事	原田修		
世羅町	世羅大豊農園 組合長理事	祢宜谷 全		
東広島市	有限会社 トムミルクファーム 代表取締役	沖正文		
東広島市	ファームおだ 組合長理事	吉弘昌昭		
広島市	太田川漁業協同組合 理事等	一月高志	谷 勇樹	島崎愛美
三次市	大前農園	大前憲三		
広島県	県庁 地域政策局 中山間地域振興課	長岡秀幸		
安芸太田町	役場 地域づくり課長	小笠原敏子		
安芸太田町	地域おこし協力隊	友松祐希		
世羅町	役場 産業振興課	正田一志	雑賀明日菜	
東広島市	市役所 政策企画部企画課	細木敏弘	平田和久	
東広島市	市役所 産業部農林水産課	平田海帆		
三次市	市役所 政策部 企画調整担当課	松本隆志	中村大明	
三次市	市役所 布野支所	植岡幸弘		
	合計	27 名		

※広大 COC 連携地域・市町等以外の出席者名は、紹介していませんのでご了解ください

添付資料 2

地（知）の拠点教育研究連携地域等功労者表彰者（全員）

市町名	所属名・職	表彰者 敬称略	表彰理由
東広島市	有限会社トムミルクファーム 代表取締役	沖 正文	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労 地域活性化への取組等の特別講座講義における功労
東広島市	農事組合法人ファーム・おだ	吉弘 昌昭	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労 地域活性化への取組等の特別講座講義における功労
東広島市	安芸津漁業協同組合 代表理事組合長	柴 孝利	教養ゼミフィールド体験学習における功労
東広島市	芸南農業協同組合 代表理事組合長	山田 政教	教養ゼミフィールド体験学習における功労
広島市	太田川漁業協同組合 代表理事組合長	森 正記	教養ゼミフィールド体験学習における功労 太田川の環境調査研究における功労
三次市	株式会社布野特産センター 代表取締役	廣田 幸男	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労 学生との共同研究開発（オリゼさんのアイ酒）における功労
三次市	大前農園	大前 憲三	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労
三次市	江の川漁業協同組合 代表理事組合長	辻駒 健二	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域活性化への取組等の特別講座講義における功労
呉市	大亀農園	大亀 孝司	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労
呉市	新果園	末岡 和之	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労
尾道市	フルーツ夢工房 代表	半田 史子	地域活性化への取組等の特別講座講義における功労
尾道市	おのべじ横山農園 代表	卯元 幸江	地域活性化への取組等の特別講座講義における功労
尾道市	株式会社島ごころ 代表取締役	奥本 隆三	地域活性化への取組等の特別講座講義における功労
安芸太田町	いにびちゅ会 会長	河野 司	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労
安芸太田町	井仁自治会 会長	大江 眞	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労
大崎上島町	金原農園	金原 邦也	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労
大崎上島町	大崎上島町食文化海藻塾 塾長	道林 清隆	教養ゼミフィールド体験学習における功労
大崎上島町	フィッシング中村	中村 修司	教養ゼミフィールド体験学習における功労
世羅町	農事組合法人世羅幸水農園 組合長理事	原田 修	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労
世羅町	農事組合法人世羅大豊農園 組合長理事	祢亘谷 全	教養ゼミフィールド体験学習における功労 地域受入インターンシップにおける功労
世羅町	世羅高原カメラ女子旅 主宰	吉宗 五十鈴	地域活性化への取組等の特別講座講義における功労




表彰式の様子



表彰の記念写真 井仁の皆さん

教養ゼミ体験授業
大前農園 江の川漁協 ゆめランド布野

三次市・布野町について



- 中国地方のほぼ真ん中に位置
- 人口...1,552人
- 高齢化率...43.9%
- 名物...ピオーネ、ワニ（サメ）輪餅、三次人形など

体験学習のスケジュール

- I. 大前農園
- II. 江の川漁協
- III. 昼食
- IV. ゆめランド布野についての講義

大前農園

- 家族経営
- 作物：米、アスパラガス、イチゴ、大豆
- 1987年からアスパラガスの栽培
- エコファーマーの資格を広島で最初に取得
目に見える「安心・安全」を目指している



大前農園



剪定をし長さを揃えて、向きを揃える

アスパラガスは成長が早いので朝夕の2回収穫する

江の川漁協



- 日本海に流れ込む、西日本最大級の川
- 川の再生のために、アユの放流、釣りの管理、川と親んでもらう活動を積極的に行っている

江の川漁協

江の川が現在抱えている課題

- 上流のダムの影響で岩に泥が付着し、アユの餌であるコケが岩につかない
- 他方で、田畑の化学肥料の影響でコケが異常繁殖している水域もある
- ゴミの不法投棄による水質悪化
- アユの天敵ともいわれる冷水病

江の川漁協



江の川漁協

投網体験

- 世界共通の方法
- 投げるまでの手順が複雑
- 投網は同時に両手を離すので、タイミングが重要

昼食



昼食

前年度のCOC企画で誕生した酒粕アイス「オリゼさんのアイ酒」もいただきました!

三次市ケーブルテレビ



<p>ゆめランド布野</p> 	<p>ゆめランド布野</p> 
<p>ゆめランド布野</p>  <ul style="list-style-type: none"> □国道54号線沿いに位置 →H25年に尾道松江自動車道が開通したため、交通量が半減 □経営者の人材不足が著しい □経営理念は「農」で、個人農家と法人農家の連携仲介を担う □消費者の求める「安心安全」の苦勞を体験してもらう 	<p>事前学習</p>  <ul style="list-style-type: none"> 優れている点 <ul style="list-style-type: none"> □自然と触れ合える □アイスの種類が豊富 改善すべき点 <ul style="list-style-type: none"> □交通の便が悪い（国道54号線より尾道松江自動車道の方が便利） □情報発信 提案 <ul style="list-style-type: none"> □アスパラガスを使ったお茶などを商品化 □ツーリングの中継地点としての機能を強化
<p>要望・課題，提案Ⅰ（ゆめランド布野）</p> <p>要望</p> <p>若い層の客が少ない問題に対する改善案をぜひ出してほしい</p> <p>↓</p> <p>提案</p> <p>公式SNSを開始し、魅力拡散・クーポン発行 お洒落なメニューで客からの情報発信も図る</p>	<p>要望・課題，提案Ⅱ（大前農園）</p> <p>要望</p> <p>アスパラガスの生パスタ色落ちしてしまう問題をどうかしてほしい</p> <p>↓</p> <p>提案</p> <p>広島大学でアスパラガスの成分分析を行い、色落ちしないレシピを共同で考案する</p>

要望・課題，提案Ⅲ（大前農園）

要望

アスパラガスの他の利用法を考えてほしい



提案

お茶「飲む」視点及び、
ハーバリウム「見る」視点から商品化

謝辞

ご清聴ありがとうございました！



冷水病



冷水病に罹患したアユ

- サケ、マス、アユに発症する感染症
- 病原菌は*Flavobacterium psychrophilum*
- 主な死因は患部からの出血による失血死
- アユの冷水病が日本で最初に報告されたのは1987年の徳島県

アスパラガスの栄養



鉄，亜鉛，コバルト

造血作用

ルチン

血流をスムーズに

グルタチオン

美白，シワ予防

アスパラギン酸

利尿作用
疲労回復
保湿効果
体調を整える

ハーバリウム



インターンシップを通じた地域体験報告（棚橋・小佐井報告）資料

 <p>広島大学中山間地域島しょ部対策領域 第4回円卓フォーラム インターンシップを通じた地域体験</p> <p>平成27年度井仁地域インターンシップ参加者 生物生産学部4年 教育学部4年</p>	<h3>井仁について</h3> <p>山県郡安芸太田町 井仁地区</p> <p>集落の中心に広がる棚田が特徴で、「日本の棚田百選」にも選ばれた美しい景観を持つが、高齢化・過疎化の影響により、集落や棚田の維持が難しくなっている。</p>  <table border="1" data-bbox="1225 586 1343 667"> <tr><td>井仁の人口</td></tr> <tr><td>世帯数 22世帯</td></tr> <tr><td>人口 45人</td></tr> <tr><td>高齢化率 52%</td></tr> <tr><td>平成27年12月現在</td></tr> </table> <p>〈地域の課題解決に向けた取組〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域おこし協力隊 棚田オーナー制度・カフェの開設 ○ いにちゆ会 井仁棚田体験会・棚田サロン ○ 広島大学との関わり 井仁マスタープランの策定 教養ゼミ・インターンシップ など 	井仁の人口	世帯数 22世帯	人口 45人	高齢化率 52%	平成27年12月現在
井仁の人口						
世帯数 22世帯						
人口 45人						
高齢化率 52%						
平成27年12月現在						
<h3>井仁へ行く前は…</h3> <p>限界集落と呼ばれる地域で住民の方や自治体、地域おこし協力隊の方はこういった取組をしているのかな？</p> <p>過疎化・高齢化に直面する状況下で地域の人はどうしたら幸せに暮らせるのかな？</p> 	<h3>中山間地域・島しょ部連携インターンシップ</h3> <p>夏休みに4泊5日、井仁地区で生活し、地域の人たちとの交流の中で、地域の実態や取り組みを学ぶ。</p>   <ul style="list-style-type: none"> ▶ 「ここに住んどる者なら、ケツのホクロまで知っとる」 ▶ 「まずは自分たちが盛り上がり、外の人が『井におもしろい』って思ってもらえるようになりたい」 					
<h3>井仁棚田体験会</h3> <p>住民によって、毎年2回（6月 田植え、10月 収穫）開催</p> 	<h3>高橋穂さんの修士論文発表会</h3> <p>過疎地域の支援に必要な要素を探るため井仁地域で修士研究を行った高橋さんの発表を聴講</p> <p>↓</p> <p>地域の人に貢献できるような活動、研究をしたい！</p> 					

棚田サロン ～おいしくご飯を食べようの会～

みんなでおいしいものを食べる機会を作ること
地域の人に元気になってほしい！



- 学生と地域の方でごはん会を企画
7月、12月の2回開催
郷土料理を作ったり工作をしたり…

2年目のインターンシップ

井仁と関わる学生の輪が広がる



カフェ～イニミニマニモ～

2017年9月にオープンした棚田カフェ



- ・カフェのDIYに参加したり
接客のお手伝いをしたり…
- ・インターンシップで知り合った
みんなと一緒にランチにも！！

第23回全国棚田サミットin長崎県波佐見町

→先進的な取り組みを聴講。鬼木棚田を視察。



井仁に行った2年半を振り返って

井仁で学んだこと…



- ・初めて井仁に行く前、自分の想像の中山間地域像の中で物事を考えていた。
- ・地域の方の目線に立って寄り添う姿勢が必要だと感じた。
- ・地域の方と交流することで、人生について、ものの考え方についての知見が広がった。

井仁に行った2年半を振り返って

今後の自分たち…



- ・これまで学んだ農村の実態を、今後の勉強や社会人としての生活の中で活かしていきたい。
- ・こういう地域の価値を、外の社会の人も見つけられるようになってほしい。
- ・これまで築いてきたつながりを、大事にしていきたい。



国立大学法人
広島大学 生物生産学部